

まちぐるみ

小規模拠点が連携

学校へ通いづらい、放課後自由に遊べる場所がない。そんな子どもたちが、学校や家庭以外に安心して過ごせる居場所を地域全体に広げていこうというまちぐるみの取り組みが、横浜市のある住宅街で行われている。遊び場として月に数回開放されている民家などの小規模な拠点がネットワークを作ることで、子どもの居場所がほぼ常時開かれている状態を確保。情報を共有し、資金の助成も受けやすくなった。さらに、特色の異なる複数の居場所が存在することで、子どもたちが自分に合った所を選べるというメリットもある。

(新西ましほ)

横浜駅から電車で約20分。横浜市旭区の希望が丘エリアは、丘陵地に広がる閑静な住宅街だ。子どもの居場所ネットワーク「soil(ソイル)」は2023年4月、この地域に点在するカフェや不登



いつも どこかが 開いている 「自分に合う所」選択肢広がる

横浜市の「soil(ソイル)」



soilが開いたイベントで、「びっくり箱」作りなどを楽しむ子どもたち

校の子たちの学び場などが連携して立ち上げた。現在八つの居場所が参加しており、週に4〜5日、まちの中のどこかに子どもの居場所が開かれている。毎週火曜と水曜の午後にはオープンする「ハートフル・ポート」は、熊本市出身の五味真紀さん(62)が自宅1階を改装したカフェとフリースペースを活用。子ども

もたちは宿題やゲーム、時には工作やお菓子作りなどをして過ごす。中学2年の裕也さん(14)「仮名」は昨春から、自宅から片道徒歩40分はかかるこの場所に、ほぼ毎回通いつづけている。「ここで過ごす時間がめちゃくちゃ居心地が良いから」学校には中1の夏休み明けから行っていないが、勉強についていけず、教室に居場所がない。数カ月間家に閉じこもり、ひたすら寝て過ごした。その後、スクールソーシャルワーカーの勧めで訪れたのが、ハートフル・ポートだった。

そこで出会った2人が同じゲーム好きで友達に。一緒に映画に行ったり、会えない日はオンラインでゲームしたり。その仲間が定時制高校に通う姿も刺激となり、裕也さんは今、週に2回学校へ行き、少しずつ授業を受けるようになった。五味さんは「soilのイベントなどを通じて、元々持っていた几帳面で責任感が強いという長所を発揮できるようになり、生き生きしている」と喜ぶ。

soilに参加する居場所は、開設の頻度や時間帯、活動内容もさまざま。不登校の子が足を運びやすいように、平日午前中に開かれる場所もあれば、休日に集まって料理したり、公園で外遊びしたりする活動が中心の団体もある。

自宅を子どもたちの遊び場「ホープガーデン」として開放しているのは、日置まり子さん(61)。かつて学習塾を営み、たくさんの子どもたちを見てきた経験から活動に共感し、1年前にメンバーに加わった。普段は別の仕事があるため、居場所を開くのは月に1回だけだ。

「子どもの足で気軽に行ける居場所がいくつもあること自体に存在意義を感じている」と日置さん。ある拠点で嫌なことがあった子が、別の拠点に顔を出すようになったというケースも出てきた。soilではホームページのカレンダーで各拠点の予定を一覧化。運営者たちは毎月集まり、情報交換も活発に行う。

soilが開いたイベントに参加していた小2の男児の母親(35)は「共働き家庭が多いから友達の家は遊びに行かせにくく、公園以外に行き場がない」とため息をつく。放課後は習い事へ行くか自宅で過ごすしかなかったという。「学校を飛び出していろんな子どもや大人と関わって、狭い世界を広げてほしい」

soilは、日本財団が16年から整備を進め、全国に約240カ所ある「子ども第三の居場所」の一つとして助成を受けている。同財団子ども支援チームの飯澤幸世さんは「地域全体を居場所化していく取り組みは他に例がない。コストが高い都市部で子どもを見守る体制を作るといって点ではないか」と期待する。